

アッララージャによる ラサ理論の新展開

大 類 純

1. 資 料

本題は、古典サンスクリット詩學における主流論題の1つであるラサ (rasa 情趣美) 理論に関して、Allarāja によつて新しく唱導・展開された局面を考察しようとするものである。その資料は専ら Allarāja の著作である *Rasaratnapradīpikā* (以下 RRP) を対象とするが、これには4種の MSS が伝えられる。Baroda Central Library (Baroda Oriental Institute) と Tanjore Sarasvathi Mahal Library がそれぞれ所蔵するものがその2種であるが、さらに P. K. Gode によつて Government Collection of MSS 所蔵の2種の異本が Bhandarkar Oriental Research Institute (Poona) に貸與され、同研究所の R. N. Dandekar によつてこれら4種の MSS が校合された結果、1945年に Bombay (Bharatiya Vidya Bhavan) からはじめて Critical edition が刊行されるにいたつた。

2. 内容の展開 (各章別)

RRP は全體が6章より構成されるが、以下各章を追うてその最も著しい特色と、従前の古典サンスクリット詩學の通説にさらに一步を進めて新機軸を加うるにいたつた新局面の意義を指摘・整理してみたいと思う。

(1) 第1章

Homage (Maṅgala-śloka: rasarūpiṇe bhagavate) によつて開卷、それにつづく著者自身および家系に關する若干の消息ないし傳承は型通りである (後述の著者論で再考)。その序の直後から、著者は基礎的問題の討議をはじめ。「喜悅」と「悲哀」の本質論の考察であるが、前者には *nitya* と *anitya* の2種がある。*nitya* は Brahman の窮極の知識から由來した喜悅・至福で、永續的不變性のものであるが、従つて *yogin* によつてのみ體得される性質のもので、一般人には無縁とされる。これに對して *anitya* は一般的經驗・通俗的感覺の対象から派生するもので、一時的瞬間性のものである。この兩者の中間に位するものに、古代の作者たちが *anirvācyā* (名狀しがたいもの) と呼んだ、*rasa* から由來する喜悅があ

り、これこそがすべての人びとに普遍妥當する眞の喜悅であり、その故にこの *asāra saṁsāra* (無價値な人生) の正に *sāra* (實體) として見なされるべきである。ここで注目すべきことは、*rasa* を通常の如く集合體概念 (e.g. 8 *rasa*'s) ではなく、1つの美意識概念に設定している點に新しい特色がある。

第1章の結論としては、慈悲の主要な結着は *puṇya* (美・善・徳・聖・福・正・純) であり、一方名聲は單なるその偶然的な結實にすぎない。*rasa* の主要な結實もまた *puṇya* である。故に *rasa* を通して、*rasa* の中に存在する神性がやわらげられるのであり、喜悅はその偶然的な結實にすぎない。このことを立證するのに、著者は *Bharata* の言明した *dharmādisādhanam nāṭyam* を引用する。

(2) 第2章

著者は、みずから *rasa* 理論の基本的要素と認める *bhāva* の本質論を展開する。彼によれば、心の基礎的な平衡状態が *sattva* で、その中に起される最初のわずかの「變化」が *bhāva* である。それは、詩人の内面の情趣ないし思想 (*an-targata bhāva*) に對して、外面の形 (*bahir bhāvayan*) を表現するが故に、*bhāva* と呼ばれる。この「變化」は根本 (原理) 的に喜悅の自然の本性であるが、4重の構造をもっている。1) *vikāsa* (表明・現出)、2) *vistara* (擴大)、3) *kṣobha* (感動・興奮)、4) *vikṣepa* (狂氣) で、順次に發展的な4段階を示す。そして、*bhāva* の場合にはこの「變化」は僅少であるが、*rasa* においてはそれと對照的にきわめて明確に現われる。

さらに、8種の *sthāyibhāva* が短い批評を附して *bhāva* の本質構成要素として列挙・定義されているが、これらは他の反對概念ないし類似概念の *bhāva* と互いに抵觸・破壊することなく存在理由をもつもので、むしろ場合によつてはそれ自身の性格を他の *bhāva* に強制する性質をさへ有する。⁽¹⁾

(1) これらの定義を興えるのに、*Allarāja* が *Daśarūpa* から逐語的に、しかも無斷で多くを借用していることを指摘できる。RRP の中には一度も *Daśarūpa* の名は明示せず、本文から縦横に借用することに終始している。RRP に興えられている説明の *stanza* でさえも、非常に多くの場合に¹⁾ *Avaloka* (*Comm. of Daśarūpa by Dhanika*) から同文がそのまま援用されていることが、仔細に検討するときに判明する。しかし換言すれば、この事實は *Daśarūpa* (AD 974~995 成立) が當時すでに演劇論ないし美學の權威ある典據として名聲を確立して、普及していたことを推察せしめるものである。

Allarāja はまた、RRP において *Nāṭyaśāstra* から幾つかの *kārikā* を引用しているが、この場合にはすべて “*tathāha bhārataḥ*” と謝辭を明示している。

[sthāyibhāva]	[bhāva]
1) rati (愛情)	} vikāsa
2) hāsa (歡喜)	
3) utsāha (氣慨)	} vistara
4) vismaya (驚愕)	
5) bhaya (恐怖)	} kṣobha
6) jugupsita (嫌惡)	
7) krodha (憤怒)	} vikṣepa
8) śoka (悲哀)	

この 8 sthāyibhāva's に與えられる定義に關する限り Allarāja の獨創的見解によるもので、既存のいかなる文獻にも依據するものでなく、おのおのの定義に附せられた説明の stanza でさえも、Allarāja の解説が全くユニークなものであることを十分にうかがうに足りる。例えば、Kavikañkaṇa によつて書かれた stanzas や戯曲 Caṇḍakauśika から著者が採用した stanzas 等は、この種の著作に見出されることはきわめて稀である。

また、この章の結末において、「僅少」な「變化」である bhāva の中でも、rati の如く實際に「僅少」と目されるものと、krodha の如く「夥多」な「變化」に屬するものがあることを提起し、しかしながら共に bhāva と呼ばれる限り、その「變化」の大小の振幅は比較上のことであり、krodha もまた raudra rasa との比較においては、正に「僅少」の「變化」を示す bhāva の限界内にあることを立證している。

(3) 第3章

いわゆる 8 rasa's 中の vibhāva (決定要素) と anubhāva (歸結) を考察する。前者は、Allarāja によつて特殊な方法 (viśeṣa) によつて rasa を創造する (bhāvayanti) 条件として定義されており、一方後者は、rasa が經驗されたもの (anubhavadogara) となりやすくするための条件であり、その条件は特殊な rasa によつて經驗されるものである (e.g. etaiḥ karuṇarasaḥ anubhūyate)。これを立證裏書きするために、彼は Nāṭyaśāstra から kārīkā を引用して、同じ条件を多かれ少なかれ列擧している。しかし、これに關連して anubhāva の概念は、Bharata によつて理解されたものと Allarāja によるそれとを注意して辨別考察

(2) Ānandavardhana に始まる dhvani 學派の系列に屬する Abhinavagupta が、とくに śānta-rasa と sthāyibhāva を rasa に包含して論じている特異性を併せて考察する必要がある。

する必要がある。Allarāja 自身による vibhāva と anubhāva の定義を除いては、この章の大部分は Nāṭyaśāstra, VI, 47~76 からの abridged の再生にすぎないからである。

従つて、anubhāva に関して列挙する条件も、rasikagata か、naṭagata か、あるいはその両方であるかについても若干の混乱がみられる。

この章は、8種の sāttvika bhāva's (没意思の状態)の列挙とその定義・解説によつて終る。著者によれば、sattva は他人の歡び、悲しみ等の状態における極度の共感同情の心である。それは、心の莊嚴な落着きであり、その故に心の平衡状態と説明されてきた。stambha (昏睡・恍惚)、sveda (不安・焦燥)等以下 8 sāttvika bhāva's は、それらの根底として sattva をもつており、それ故に sāttvika と呼ばれる。Allarāja によつて與えられたこの sāttvika の術語の解説は、他のサンスクリット修辭學者等によつて與えられたそれとは異なり、後者にあつては sattva を單に“肉體”の感覺においてのみ理解している。

しかし、Dhanika がその Avaloka の中で sattva をほぼ同一のことばで説明していることから、Dhanika の註釋が RRP の典據であることが推定される。と同時に、Dhanika 自身も彼の註釋のこの部分を他の文獻に負うていることを類推せしめるに足る點を残している。

(4) 第4章

この章は、vyabhicāri bhāva (一時性・無常性)を扱うが、そのほとんどが Daśarūpa, IV, 7~33 の逐語的な模寫である。解説さえも、そのほとんどが Dhanika がその Avaloka で與えているものと同一であるが、ここにおいてなお2つのことが注意されるべきである。

第1には、この章の2~4 stanzas において、Allarāja が vyabhicāri bhāva を列挙しているが、その順序が Daśarūpa におけるそれとは異なつてゐることである。

第2に、定義は異なつた順序で自然に與えられており、大抵の場合 Daśarūpa から逐語的に借用されているが、Daśarūpa の stanza の前半、つまり定義そのものを與えている部分のみがここ (RRP) では複寫再現され、vyabhicāri bhāva の外部的効果を正規に述べている同じ stanza の後半の部分が脱落していることである (e.g. nirveda, glāni)。

異なつた rasa の vyabhicāri bhāva's を列挙する限り、Allarāja は Nāṭyaśāstra, VII, 99~109 に依據している。

彼はさらに, *sāttvikabhāva*, *vyabhicāribhāva* および *sthāyibhāva* に関する若干の不規則性 (*vyabhicāra*) を扱い, また本来 *sthāyibhāva* である *utsāha* と *bhaya* が時に *vyabhicāribhāva* として述べられていること, *vyabhicāribhāva* である *moha*, *āvega*, *ālasya* が他の副次的な *bhāva* を喚起すること——すなわち *mūrccā*, *sambhrama*, *tandrā* をそれぞれ喚起すること, また *sāttvikabhāva*, *svarabheda* が *gadgadatva* と呼ばれる変化を生み出すこと, を指摘して *sthāyibhāva*'s を扱っている。この章は, *ālasya* (怠惰) と *tandra* (倦怠・疲勞), *sambhrama* (驚愕・狼狽) と *āvega* (不安・動搖), *nidrā* (睡眠) と *svapna* (夢見) と *supta* (深い眠り), *svarabheda* (荒れた發音) と *gadgadatā* (不明瞭な發音) の間のそれぞれの區別を明らかにすることが論議されて結ばれる(詳論紹介省略)。

(5) 第5章

はじめにおいて, *Allarāja* は *Daśarūpa* に従つて, *sthāyibhāva* が *vibhāva*, *anubhāva*, *sāttvika bhāva*, *vyabhicāri bhāva* の働きを通して喜悅の情感を生み出すときに, *rasa* が結果として生じることを述べる。しかも, この章は全章にわたつて 8 *rasa*'s とそのそれぞれの變化形を多かれ少なかれ月並みな傳來の踏襲的方法において取扱うが, *rasa*'s の定義はふたたび *Daśarūpa* からの借用に依っている。

またこの第5章は, 種々の典據から援用した解説に富んでいることが指摘できるが, それらの中で *Kavikaṅkaṇa* や *Bherijhānkāra* によつて書かれた *stanzas*, 戯曲 *Caṇḍakauśika* や *Udārarāghava* から採られた *stanzas* は, RRP に獨特のものである。しかし, *Allarāja* によつて引用された *stanzas* の中にはその原典の不明のものも少なくない。それらの中には *Rāma* の物語に関連があり (e.g. V. 36~37, 52~53), *Rāma* 劇からの取材を推定せしめる。

(6) 第6章

この章では, 既存の *text* からの逐語的借用はなく, あらゆる定義はすべて *Allarāja* 自身によるものである。

Daśarūpa (II, 30 ff.) は, *heroine* に備わる 20 の天性の美的特質を述べ, その中の *bhava* (情感), *hāva* (情緒), *helā* (情熱) の3つを *physical* な觀點から區別を施しているが, RRP においてはこの三者間に對する區別は與えられていない。ここでは 10 *hāva*'s の考察だけが行なわれ, それらは婦人に特有のものとしてされている。さらに, *Daśarūpa* が *lilā*, *vilāsa* 等の 10 種の 1 類の特質を *svabhā-*

vaja bhāva (天性の特質)として述べているのに對し, RRP は hāva として規定する。そしてこの 10 hāva's を列挙・定義・解説した後、Allarāja は rasa 理論に關連をもつ一般論題を取上げる。

彼は, hṛdaya を buddhi (心)として定義することからはじめ、それは古代の vāsanā's (感動)によつて性格づけられ、知識によつて磨きをかけられることによつて完全なるものに洗煉されるにいたつたと説明する。hṛdaya をもっている者 (sahṛdaya) の心の中には, rasa がかならず潜在的な印象の形で存在する。この hṛdaya が, 表現の藝術においては作者(演者)によつて, rasa の種を覺醒させる bhāva's の働きによつて表現され、明白・明快なものとなるにいたる。この rasa の2つの形の概念, すなわち vāsanārūpa と vyakta は, Abhinavagupta (Abhinavabhāratī) と Jagannātha (Rasagaṅgādhara) によつて詳細に解説されている。rasa には, その情念の起因としての 4 rasa's とそれらの結果として具現する4つのそれぞれの効果とがあり、それらのおのおの對應する兩者の間の因果關係の法則は、詩人の意圖によると同様に、物語りの特殊な文脈(前後關係)に従つて變化することを免れがたいということが付け加えられている。

次に, 互いに相容れない rasa's の考察を行なうが, これに關連して Allarāja は, 同一の文脈内でかならず主要な情趣を破壊せしめる原因となる2つの相い對立する rasa's について述べる。それゆえ, 1つの rasa との接觸においてその反對概念, すなわちその vibhāva, saṁcāri bhāva, anubhāva を抜き出すことは望ましくないことであるが, しかし, もしも2つの相い對立する rasa's が一緒に述べられても, それが第3の主要な rasa に全く從屬するものとして述べられたならば, それらは効果を破壊するものではない。

ついで, Allarāja は Ānandavardhana (Dhvanyaloka, III, p. 145) によつて明らかに展開されている原理を引用する。すなわち, 妥當性の缺如ほど情趣を妨害する原因となるものはない, ということである。その具體例からの派生として, Rāmāyaṇa その他を素材として「眞の愛情」の本質とその形態等の論議を展開する。

つづいて, 彼は śānta rasa の問題を考察する。平靜な人びとは, 自分の心の平衡状態の中におけるいかなる變化にも陥らない人びとであり, それゆえ, Bharata はいかなるこの種の情趣の可能性をも「平靜」(心の平和)の情趣として設定することはなかつたし, 他の修辭學者たちも śānta rasa は nirveda (「眞實」を知ることによつて起される不満足あるいは自己輕視)に基礎が置かれていると考え

る。そのため、これはしばしば vyabhicāribhāva's の1つとして述べられ、しかもこの rasa の sthāyibhāva として見なされうる。平静ということは、世俗的な対象に無関心である結果であり、それは裏を返せば nirveda からの結果である。これに反し、Allarāja は śānta rasa を容認し、その anubhāva's を述べている。ここでは śānta rasa の概念は、それが単に世の中におけるあらゆる悲しみの消滅した状態を指すかぎりにおいては、消極的な概念であることが明白になるということが指摘されうる。それはまた、あらゆる苦しみが断絶することによつて成立し、著者によつて、牢獄から解放された人の幸福に對比されている。

一部の修辭學者たちによつて容認されてきた vatsala rasa に関しては、Allarāja はそれは単に rati の一面としてみなされるべきであるという。彼によれば vātsalya は両親がわが子を抱いたときに必然的に起る愛着の感情である。

この章の最後において、karuṇa (悲哀) と bibhatsa (憎悪) は根本的に苦しみ(痛み)の性格をもつもので、いかにして rasa's としてみなされうるか、という論題が論じられている。

3. 著者 Allarāja について

著者の歴史上の関係は明白であるにもかかわらず、その年代と生涯についての詳細な點は、彼のこの著作 (RRP) 自體からはほとんど集めることができない。RRP の序説の中で、著者は Hammīra 王の息子であることを告げ、王の家臣の中で Koṅkaṇa の統治者についてとりわけ言及されている。この2つの資料だけが、Allarāja の生涯を再構成するに有効な直接的な史料である。ただし、この問題にアプローチする別な間接的方法も残されており、それは RRP に引用された著作文獻を精査することによる著者の年代の上限を設定することの可能性である。

Bharata, Arjuna, Kohala, Kāśyapa, Nārada 等による傳承的に知られた古代のサンスクリット演劇論や修辭學著作は別として、Allarāja は RRP の中において次の作者ないし著作に言及するか、もしくはそれからの引用を行なつており、それらの年代は學界においてほぼ決着をみている。

Śakuntalā, Meghadūta, Mālavikāgnimitra (by Kalidāsa AD 5 C); Kirātārjunīya (by Bhāravi AD 634?); Kādambarī (by Bāṇa AD 7 C 前半?); Ratnāvalī (by Śrī Harṣa AD 604~47); Śīsupālavadhā (by Māgha AD 7 C 後半?); Mālatīmādhava (by Bhavabhūti AD 7 C 終); Nāṭyārṇava (by Nandikeśvara AD 8 C 以前); Caṇḍakauśika (by Kṣemīśvara AD 9 C?); Veṅīśamvarana (by Bhaṭṭa Nārāyaṇa

AD 840 頃); Dhvanyaloka (by Ānandavardhana AD 9 C 中葉); Hanumannātaka (by Dāmodara AD 10 C); Nāṭyālocana (by Abhinavagupta AD 1013 頃); Prabodhacandrodaya (by Kṛṣṇamiśra AD 1097~1165); Bhāvaprakāśana (by Śāradātanaya AD 1175~1250)。以上によつて、RRP は AD 1175 以前に書かれえなかつたことが明らかである。

次に、RRP に言及している諸著作を検討してみるに、Mammaṭa の Kāvya-prakāśa の Comm. Sārasamuccaya (by Ratnakaṇṭha) に引用されている。Ratnakaṇṭha はカシュミールの Dhaumyāyana Gotra の Saṅkarakaṇṭha の息子で、彼の太陽讃歌が AD 1680~81 に編集された Ratnaśataka (Citrabhānuśataka) の中に入っている。また、彼は 1681~82 に Ratnākara の Harivijaya に註釋書を、1680~81 に Jagaddhara の Stutikusumāñjali に註釋書を、1671~72 に Vāsudeva の Yudhiṣṭhiravijaya に註釋書を、Yaśaskara の Devīstotra に註釋書を書いた。これらの中に言及・引用されている RRP を対照比較して、Allarāja の下限は 1650 頃と比定される。しかしながら、Bhānudatta の Rasatarāṅginī の中に RRP が引かれている點を勘合すると、⁽⁴⁾Bhānudatta の時代には RRP は知悉されていた作品であつたことが判り、その下限境界線はさらに狭まる。Bhānudatta の年代は AD 1300~1350 と推定される。⁽⁵⁾

ここから、Allarāja の上限は 1175~1250、下限は 1300~1350 と假定することができる。

以上は、文獻の徴しうるものによる考察であるが、次に歴史的資料の證するものを見ると、歴史上、Hammīra の名を冠する王は次の 4 人を数える。

- 1) Chohan 王家の分家 Hārauti の Hammīra。彼は Pṛthvirāja の保護を受け、さほど有名ではない。AD 1193 に弑せられた。
- 2) Ranathambhor の Chohan 王の Hammīra。統治期間は AD 1283~1301。
- 3) Mewar の Hammīra I。生存年代は AD 1301~65。
- 4) Mewar の Hammīra II。生存年代は AD 1761~78。

(3) Krishnamachariar: Classical Sanskrit Literature, p. 759.

(4) Bhānudatta: Rasatarāṅginī (in Grantharatnamālā), p. 3.

(5) Bhānudatta の年代についての異説には、次の如きものがある。P. V. Kane: SD, Intr., p. cxviii; S. K. De: Sanskrit Poetics, Vol. I, p. 249; Krishnamachariar, CSL, p. 774; S. K. De: ABORI, XVII, p. 297; H. D. Sarma: ABORI, XVII, pp. 243~58; P. K. Gode: IC, III, pp. 751~56.

(6) Bhāvaprakāśana, ed. Yadugiri Yatirājasvāmin, GOS, Intr. pp. 72 ff.

この4者の中、第4の Hammīra は 1761. 6. 13 に生まれ、1773. 3. 11 に即位、1778. 1. 6 歿で、RRP の著者の父たりえないことはいうまでもない。第1の Hammīra が、RRP に言及されている Hammīra と同一人であるならば、Allarāja は多かれ少なかれ Bhāvaprakāśana の著者 Śāradātanaya (AD 1175~1250) と同時代人とみなされなければならない。しかしながら、RRP の中に引かれている Bhāvaprakāśana の状態から推して、Allarāja の時代には Bhāvaprakāśana は既に演劇論に関する古代の權威ある著作としての評価を確立していたことがしられる。従つて、この書と RRP の間にはかなりの時間の経過があつたことをうかがわしめる。第3の Hammīra I は、Rajputana のきわめて著名な國王で、多くの名譽と功績が歸せられている。Tod は、Hammīra の経歴・生涯についてのさらに詳細な調査を與えている⁽⁷⁾。Delhi の Allauddin は 1290 年に、Lakhamasi (Lakṣmaṇasīmha) が統治していた Chitor に侵入しようと準備をすすめていた。その結果 Lakhamasi 一族は惨敗を喫し、Allauddin が Chitor を領有したが、それは 1303 年のことであつた。この間の消息は Tod の詳しい研究成果に譲り、その結果 Mewar の Hammīra I の年代 (1301~65 AD) は RRP の著者の父の年代に該當するということに導かれる。しかし、この Hammīra が RRP の中に言及されている Hammīra であるという推測に對しては、2つの考察が可能である。第1には、Mewar において Hammīra の後繼者の名前は、Mewar の統治者の系圖の中に明らかに言及されており、それは多かれ少なかれ未解明のままに置かれている。Hammīra の4人の息子の中で Allarāja と呼ばれたものがいた證跡はない⁽⁸⁾。第2に、Hammīra の數ある功績の中で Koṅkaṇa の征服、あるいはそのことについての Deccan 地方の征服について觸れているものは誰もいない。彼の功績はすべて主として Rajputana とその近隣地方に限定されており、このことはさらに強く、もしも RRP の中に言及される Hammīra が Mewar の Hammīra I と同一人とされるならば、Allarāja は AD 1365 年以後において Bhānudatta (AD 1300~50) より年少の同時代人と見なされなければならないことを示している。この場合には、Bhānudatta が RRP を名聲の高い作品として述べていること自體が、RRP は Allarāja が Mahīpati になつた後に、つまり AD 1365 年以後にのみ書かれたに違いない以上、適確に説明する

(7) Colonel Tod: The Annals and Antiquities of Rajasthana, Vol. I, pp. 280 ff.

(8) それらの名は、Kṣetrasiṃha (Khetsi), Lūṇā, Khaṅgāra, Bairisāla.

ことができない。

ここにおいて、第1・第3・第4の3人の Hammīra はいずれも、RRP に述べられた Hammīra には該当しえないことが判明した。

ところで、第2の Ranathambhor (Rañastambhapura) の Hammīra は、Nayacandra Sūri (AD 1486) の書いた Hammīra-Mahākāvya (以下 HM) の hero⁽⁹⁾ である。この詩によれば、Hammīra は Jaitrasimha の息子であつた。AD 1283 年に、Jaitrasimha は息子の Hammīra に國家の正しい行政管理についての優れた訓戒を與えた後、國王としての権限を譲り、自分自身は森の中に隱棲してしまつた (HM, VIII. 56)。この直後に Hammīra は、6つの guṇa と3つの śakti を賦與され、遠征の途に上つた。HM の第9 sarga には、Hammīra の幾つかの勳功についての長い敘述がなされている (st. 15 ff.)。Bhīmarasa の Arjuna 王とともに出陣して、Maṇḍala, Dhārā, Ujjayinī, Chitrakūṭa (Chitor), Medapāṭa (Mewar), Arbuda Adri (Abu 山), Vardhanapura, Caṅgā, Puṣkara, Śākambhari, Mahārāṣṭra, khaṇḍilla, Campā, Kakarāla を次々に彼は征服した。やがて Sultan Allauddin との戦闘で、Rañastambhapura の包圍の中で Hammīra は「無数の矢に貫かれて」英雄の最期の幕を閉じた。HM には詳細にこの有様が描かれているが、この悲しむべき終焉は彼の統治18年目 (AD 1301) の Śrāvaṇa の月に起きた出來事である。Amir Khusru の Tarikh-i-Alai は、その年代を AH 70 の第3 Zi-l-kada, すなわち AD 1301 の7月のことであつたとする。

もしもこの AD 1301 を Hammīra の死亡年代であると認容するならば、これまでに文獻上の確實な典據によつて到達しえた Hammīra の息子と稱する Allarāja についての上限・下限によく適合することが判る。Allarāja が, Rasatarāṅgiṇī の著者 Bhānudatta の年上の同時代人であつたということは、全く適切な可能性をもつように思われる⁽¹¹⁾。しかし、この関係に見られる関連づけには2つの重要な點がある。RRP は、Koṅkaṇa の王は Hammīra の家臣であり、Koṅkaṇa 征服は Hammīra にとつては特にきわだつた偉業であつたことを述べている。しかしながら、Hammīra の digvijaya (HM, IX) の敘述からすると、このことは實情とは合わないように思われる。Hammīra によつて征服された諸王國の中に

(9) HM, edited by N. J. Kirtane, Bombay, 1879.

(10) do., Intr., p. 47.

(11) この事實は、RRP の作者は Bhānudatta の父であると推定する一部の學者を出すにいたつた。

は Koṅkaṇa の名は見當らない。しかし、HM によれば Hammīra はその遠征途上に Deccan に到り、Mahārāṣṭra を征壓したが、その中に Koṅkaṇa を包含していた。むろん、このことがなぜ RRP に暗示されたように Hammīra の特別の武勳としてみなされているかは明瞭でない。次に、HM の hero である Hammīra が RRP の作者の父であるという假説の中に現われてくる第2の矛盾は、Allarāja が HM の中に一度も言及されていないということである。事実として、Farishta によれば、Sultan Allauddin との戦闘で Hammīra が戦死してから Ranathambhor の Chohan 支配はとだえてしまった。このことは、Rajputana のいかなる歴史の一頁にも Hammīra の後継者については何ら觸れられていないことを説明している。それでは、Hammīra の息子なりと自稱する Allarāja が自分をまた Mahīpati とも稱するのは何故であろうか。決定的な證據は何ひとつないが、この関連においては1つの推測を逞しくすることだけが許されるかもしれない。つまり、Hammīra は Sultan Allauddin との戦いで死に、それ以後 Ranathambhor の Chohan 支配は實際上終つたが、Allauddin がその遠征で Chitor のとりでを占據した後(AD 1303年頃)に Delhi に歸還した時に、Ranathambhor の支配権は一時的に回復し、Ranathambhor の Hammīra の息子なる Allarāja がその任務を帯びたということがありうるかもしれないということである。Rajputana 史におけるこれらの年次は、無視することのできない政治上の騷亂によつて特徴づけられていた。Chitor の大要塞は荒廢し、Rajput の勢力を強化するに足る強力な Rajput Rana はほとんど消滅の状態にあつた。この悲惨な状態は Mewar の Hammīra I が AD 1327 年に Chitor にその勢力を築くまでの數年間つづいたに違いない。この Hammīra は、多くの偉勳を打立てたが、ほどなく逝去した Allauddin の後継者 Mahmud に挑戦し、遂にこれを Singoli の戦闘において打ち果した。Allarāja が一時的に Ranathambhor を統治したのは、Rajputana の政治史上におけるこの短い動亂期の間のことだつたに違いない。他の領域においても見られたように、Ranathambhor は Mahmud との條約の結果として Mewar の Hammīra の手に入つた。Allauddin が、Allarāja の父の Hammīra からその要塞(據城)を奪つた後、彼自身によつて彼の代理として Allarāja を Ranathambhor の統治者に任命したことは、なおいつそうありうることである。それは丁度、Allauddin が AD 1303 年に Lakṣmaṇa-

(12) RRP, I. 4

simha (Lakhamsi) からその據城を奪い、自己の代理として Māladeva を Chitor の統治者として任命したのと全く軌を一にしている。Hammira の息子としての Allarāja の名前が、どの Rajput 王族の系圖の中にも現われないということは注意されるべきである。Ranathambhor の Chohan 王である Hammira の息子の本来の名は、いろいろの異名をもつてはいたが、父の Hammira が敗北を喫して戦死した後でさえも、Delhi の Allauddin が彼に Ranathambhor の Mahipati と名乗ることを許して特別の厚情を與えた恩義をいつまでも追慕して、Allauddin にならつてみずから Allarāja と呼稱したということもありうるのではないだろうか。

ともあれ、現在驅使しうる文學史および歴史的資料の範囲内において、Allarāja の父の Hammira を Ranathambhor の Chohan 王の Hammira と同一人であると査定することによつて、RRP の成立年代を 14 C 始めに設定することに結論を導きたいと思う。

そして、この RRP のインド古典詩論史ないし美意識思想史上における意義は、“bhāva” の本質論を集中的に展開したことである。bhāva (sattva に對する心の變化・4段階)、sthāyi-bhāva (8種) (以上第2章); vi-bhāva, anu-bhāva, sāttvika-bhāva (8種) (以上第3章); vyabhicāri-bhāva (第4章), svabhāvaja-bhāva (第6章) の分析・考察に見られるように、Allarāja は「人間の心の中に起る變化」論を餘すところなく論じて、ラサ理論の新しい展開に大きく寄與したといふことができるであろう。